

■はじめに

皆さんは『2020 年』と聞くと、何を思い浮かべますか。やはり『東京オリンピック・パラリンピック』でしょうか。教育関係者なら『大学入試改革』を思い浮かべるかもしれません。一条高校の卒業生であれば、『創立 70 周年』と想像する人もいるでしょう。

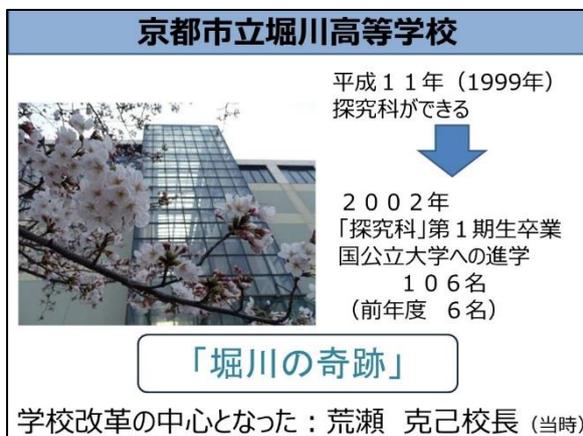
一条高校では、創立 70 周年を記念して、現在、老朽化している講堂を、東京オリンピックのメイン会場となる新国立競技場の設計者である隈研吾氏の設計により、建て替える計画が進んでいます。新しい講堂とともに 70 周年を祝い、次の 70 年に向けて歩み始める未来の一条高校の在り方を考えるとともに、改めて奈良市の小中学校の義務教育の出口として目指す学校となるようにと、現在学校改革を進めているところです。

今日は、そんな学校改革について話をしたいと思います。



■堀川の奇跡

京都市立堀川高校は 2002 年、国立大学への入学者を前年度の 6 名から 106 名へと一気に躍進させ、「堀川の奇跡」と呼ばれた学校です。その学校改革の中心となったのが、当時、教頭から校長になった荒瀬克己さんです。



その頃の京都では、高校教育、特に公立高校の本質が問われていた時期でした。そのような中で、「何とかしなければ」と意気投合した荒瀬さんを含む 40 歳前後の教師が 4 人集まり、「どんな学校なら自分の子どもを行かせたくなるか」「学校をどのように変えればそうなるか」と考え、職員会議の中に学校改革のための委員会を立ち上げました。

そこで、まず議題に上がったのが、「授業改善」でした。校内には「学校を変えること」

に強い抵抗があったようですが、授業時間を 50 分から 90 分にすることを提案すると、これまで改革にあまり関心がなかった教員も、自分の授業内容に影響が及ぶため目の色が変わり、大きな議論となりました。おりしも京都市教育委員会でも高校改革に動き出し、ここから堀川高校の改革が始まったということです。

■教育は何のために行われるのか。学校は何のためにあるのか。

荒瀬さんの著書に『奇跡と呼ばれた学校』という本があります。その中で荒瀬さんは、次のように語っています。

「大学合格だけが教育活動の唯一の目標でないことは言うまでもなく、ましてや生徒の人生の最終目標ではありません。だからといって、受からなくてよいと思っ

ているわけではありません。
(中略) 合格するかどうかは確かに重大事ですが、しかし本当に大切なのは、それぞれの生徒が今を、そしてこの先をどう生きるかでしょう。」

(出典：『奇跡と呼ばれた学校』)

世間の高校を見る目は、どうしても『大学進学』という結果にとらわれがちです。荒瀬さんは堀川高校の改革を進める中で、「大学合格を目標とすること」にずいぶん抵抗感があったそうです。

ある日、目の前で生徒たちが力を合わせて一つのことをしている幸せそうな光景を目にし、『改革』という言葉には、何が何でも進めなければならない、変えなければならないという響きがある。『教育改革』『学校改革』『授業改革』と、改革の風潮は高まり、「生きる力」をつけることを目標に、「学校力」や「教師力」といった言葉も生み出され、学校が問われ続けている。しかし、その改革は

何のために進めているのだろう。なぜ、改革を行わなければならないのだろう。そして、その成果は、何によって評価されるのだろう。と考えさせられた。」と綴り、「教育は何のために行なわれるのか」「学校は何のためにあるのか」と考えたといいます。

今、同じように、一条高校でも、「何のために教育を行うのか」「市立の高等学校として、何のために一条高校は存在しているのか」と議論を重ね、学校改革を進めようとしています。全国的に少子化が進み、大学入試改革や県立高校の再編計画の中で、一条高校も、10年、20年先を見据え、「どのような学校にしていくべきか」という将来構想を考える必要があるからです。

体育祭の翌日に目撃した高校3年生の姿から

『改革』という言葉には、

**何が何でも進めなければならない、
変えなければならない**

しかし…

という響きがある。

その改革は**何のために**進めているのだろう。
なぜ、改革を行わなければならないのだろう。
その成果は、**何によって**評価されるのだろう。

**「教育は何のために行われるのか。
学校は何のためにあるのか。」**

一条改革は小中の教育を見直すもの

- ・11月9日（金）公開研究会
- ・一条高校のこれからの教育について議論
SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）の申請に向けて

↓

小中学校からどう教育が繋がってきているか
幼児教育から、どう科学的な目を培っているか
奈良市全体の教育の在り方とも関わっている

**「目指す学びの姿と生徒像」がある学校
奈良市のフラッグシップ校に**

また、一条高校の今後の在り方については、先日開催した定例教育委員会の中でも議論を行いました。意見交換の中では、『個性を生かす、個性を伸ばす』という視点で、先生方が生徒とどう向き合うかということが大切である。」というご指摘もありました。

堀川高校では、あえて「二兎を追う」ということを大切にしているといえます。この「二兎を追う」とは、目に見える学力と

としての「受験対応力」と、すぐには目に見えないたくさんの学びや「探究学習」を通して得られる「生きる力」の両方を伸ばすことに取り組むことです。

学校とは、生徒の可能性を信じて応援する場であり、それが教師の大事な役割です。一条高校もそのような学校になってほしいと思っています。

■学校改革はすべての学校で行っていくもの

11月9日に、一条高校で去年に続いて2回目の公開研究会を行います。今年は、指導案検討の段階から市教委の指導主事も加わり、検討を重ねています。こうした学校と教育委員会が一緒になって進めていく授業研究は、義務教育である小中学校では当たり前に行われている手法ですが、高等学校では、画期的なことです。一条高校では、あえて今まで高校の文化として定着してこなかった授業研究に取り組もうとしています。

また、今後、一条高校ではSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）※の申請を行おうと考えています。SSHの申請では、単に高校で先進的な理数教育を行う、ということだけではなく、幼児教育・小中学校から、「どう科学的な目を培い、どう教育が繋がってきているのか」という奈良市全体の教育の在り方とも関連しています。

一条高校が、奈良市において義務教育を終えた先にある「目指す学びの姿と生徒像」がある学校、本当の意味での奈良市のフラッグシップ校になってほしいと思っています。そのような意味でも、一条改革は小中学校の教育を見直すものであり、学校改革は、すべての学校で行っていくものなのです。

※SSH：文部科学省の事業の一つ。科学の担い手を育てるため、科学技術・理科・数学を重点的に教育することを目指す。

■変化に満ちた時代の変革を

アメリカのキャシー・デビットソン教授が、『2011年にアメリカの小学校に入学した子どもが大学を卒業するときには、その65%が今は存在しない職業に就く。』と予測して、既に7年が過ぎました。これまでに何度も話してきましたが、世の中はとてつもないスピードで変わっています。時代が変わっていくスピードの中にいると、その変化はなかなか実感できませんが、当たり前前の常識や前提が大きく変わる「パラダイムシフト」は、私たちの周りでも起こっていました。例えばスマホがその一例と言えるのではないのでしょうか。iPhoneが誕生したのは2007年。その2年後には、日本でも爆発的な人気となり、今いる子どもたちは、その激動の時代を生きているのです。その結果、今ではスマホなしの生活は考えられないようになりました。

未来の社会を生きていく子どもを育てるためには、学校を変えていかなければなりません。そのためには、まず現状を謙虚に見つめ、課題を知ることが大切です。

荒瀬さんも「今までのすべてがダメじゃない。しかし、より良くするには新しいものを入れなくてはならない。それが変化に満ちた時代の変革だ。」と語っています。

8月校長会の『未来の学校とEdTech』の中で「50センチ革命×越境×試行錯誤」について『身の回りにある小さな気づきを「大きな革命」の最初の一步に変えるのです。』という話をしました。身の回りにあるものをよく見て、良いものは残していく。そのいいものを残していくために、何を変えていかなければならないのか見極める必要があるのです。一気に大きな改革を考えるのではなく、身近なところ、自分の50センチ隣にあるようなものから改革を始めることが大切です。

まずは身近な課題を見つめ、多様な意見に謙虚に耳を傾け、議論を重ねて、一步を踏み出す。校長先生方には職員の意識を改革し、それぞれの学校を引っ張って行ってほしいと思います。

学校改革はすべての学校で行なっていくもの

時代は大きく変わってきている
子どもたちは、激動の時代を生きていく



未来の社会を生きていく子を育てるために、
学校を変えていく。

そのために、
現状を謙虚に見つめ、課題を知る